

国際ジャーナル JOURNAL

THE INTERNATIONAL GRAPHIC JOURNAL

9

Sep. 2007

VOL.25 NO.312

巻頭特集

農業再生—— 「担い手」を育てる

特別企画

- 地域に生きる
- 企業は人なり～その人物像を探る
- 暮らしを支える医療福祉
- EXPERT'S EYE
- 職人に訊く ■社寺聴聞
- 教育現場からのたより
- 逸店探訪

表紙：シモン・ペレス（イスラエル大統領）

地域に生きる

「良いものをつくり続けたい——
その情熱を抱き続けていれば
きちんと評価していただけるものです」

「日甲」が運営管理する「浜野リサイクルセンター」では、独自の技術で焼却灰や煤塵に含まれる有害物質を無害化し、優良建設資材に加工。路盤材や土壌改良材、埋戻材などへの再利用に成功した。新しいリサイクルの在り方を見据える剣持社長に、女優の大西結花さんがインタビュー。

Corporate Data

産業廃棄物処分許可番号 第5520114834号

浜野リサイクルセンター 株式会社 日甲

千葉市中央区浜野町 1025 番地 218
TEL 043-305-1225

大西 剣持社長はもともと環境事業に携わりたいとお考えだったのでしょうか。剣持 いえ、そうではなかったのです。私は山梨の大学を卒業後、横浜の建設会社に就職しました。当時は独立など考えたこともなく、技術者として大きなもの、素晴らしいものをつくり続けたいと考えていました。しかし、職場の大先輩が定年と同時に再雇用されたものの、閑職に

甘んじる姿を見て、できることなら一生現場に携わっていたいものだと考えるようになり、独立を意識しはじめたのです。そして、1970年に「甲栄建設」を創業し、公共事業を中心とした業務で、千葉県インフラ整備に携わってきました。千葉に暮らして、もう40年ほどになります。大西 それでは、環境事業を手掛けられたきっかけをお聞かせ下さい。

「前向きな姿勢と不断の努力が 成功の要因なのですね」

「長年携わられている土木業について、そして新規事業として取り組まれているリサイクル事業についても、剣持社長はとて楽しそうにお話くださいます。お仕事を楽しめる前向きな姿勢が、良い結果を生んでいるのでしょうか。今後益々のご活躍を、楽しみにしています」



ゲスト 大西 結花



代表取締役 剣持 甲斐太郎

山梨県甲府市出身。山梨大学卒業後、横浜の建設会社に入社した。1970年に「甲栄建設」を創業し、土木工事の分野に従事。2003年に「浜野リサイクルセンター」を設立し、廃棄物処分場で生じる焼却灰などの建設資材へのリサイクルをスタートした。

剣持 インフラが整備されていくに従い、いずれは公共事業が減少するだろうと予測していた私は、今後は経営面で、土木事業・環境事業・不動産事業の三本の柱を確立しようと考えようになり、経営方針を変更することにしました。すると、良いタイミングが重なり、環境事業を順調に軌道に乗せることができたのです。この分野は今後もさらなる成長が見込めますし、経営の安定性を考える上でも当社の主要業務なのです。

大西 循環型社会の確立は日本だけでなく、世界が取り組む課題だけに将来性が高いのでしょうか。しかし、それだけに難しい部分も多いように感じます。

剣持 そうですね。この分野の難しさは、私も痛感しています。法律にせよ技術にせよ、目まぐるしく変化していますので、常に最新の情報を把握しておく必要があります。かつては回収したらすぐに焼却処理されていたものでも、現在は焼却場にリユースできるものを分別し、更に

過去・現在・未来を見つめ 循環型社会の確立に貢献する



「より良いものを提供し続けたい」—— 剣持社長と想いを分かち合い、業務に当たっているスタッフの方々・奥様の花子さん（写真前列左端）と共に

境保全に貢献したいと考えているのです。

大西 キャリアの長い土木業に関連した事業だからこそ、これまでの豊富なノウハウや経験を活かして、より良い製品を生み出すことができるでしょう。

剣持 はい。職種に関係なく、消費者や利用者に満足してもらえる製品や

サービスを提供することが、仕事の原点です。ですから私は、「いかに良いものをつくるか」、「どうすればより良くなるのか」を常に考えています。良いものをつくれれば、必ず喜んでいただける——消費者や利用者の良い気分になってもらえれば、製造する側も気分が良くなり、「さらに良いものをつくらう」という原動力につながるわけです。たとえそれが自己満足でも、良い製品は必ず評価されるものです。

大西 自分でも満足できない仕事は、他の人の心を動かせないという点では、演技にも通じるものがありますね。最後に、今後の展望をお聞かせください。

剣持 リサイクル業界は日々変化している業界ですので、今の事業をある程度拡大すると同時に、将来的に企業として存続できるように基盤を安定させたいと考えています。

“企業は人なり”に似ている言葉で“企業は永遠なり”という言葉がありますが、土木分野に携わり、企業が永遠ではないことを知りました。リサイクル業界もニーズに左右されるでしょうし、将来、必要とされなくなる可能性もゼロではありません。だからこそ、どうすれば生き残れるのかをよく見極め、生き残れる形をつくりたいのです。そのためにも日々の変化を見逃さず、柔軟に対応しながら、新しいリサイクルの在り方を追求したいと考えています。

(取材 / 2007年6月)



サイクルできるものを分けます。ですから焼却処分される廃棄物の全体量は、現在減少傾向にあるのですよ。

これまで、廃棄物処分場で生じる焼却灰は全て廃棄処分となっていました。しかし、今は焼却灰をリサイクルしようという動きがあります。私どもでは灰に含まれる有害物質を、特殊固化剤とセメントで化学反応させ、重金属などの溶出を封鎖・無害化。国の土壤環境基準以下にして、優良建設資材へと加工し、路盤材や土壌改良材、埋戻材などにリサイクルしています。加工の際にも二次公害汚染が少ない画期的なプラントを稼働させると共に、製品の安全性の向上に努め、環

地道に信用を積み重ねる姿勢が、本当の財産を築く

▼長引く不況やデフレスパイラルの影響で、多くの企業がコストの削減や徹底した合理化を行っている。企業として、組織を維持する最低限の利益を求めるのは当然だが、利益の追求だけに走ってしまえば、組織から“人間らしさ”が失われる。「浜野リサイクルセンター」の剣持社長は、「利益を追求するだけでは良い経営など叶いません」と語る。だからこそ社長は仕事を楽しみ、より良い結果を出せるよう努力し続けている。その姿勢が、信頼という掛け替えのない財産を築く。そしてその姿勢を守り続ける限り、利益は自然についてくると社長は考えているのだ。



*こちらの記事は http://www.kokusaig.co.jp/0709/jn_nikkou/ でもご覧いただけます。